

リレーコラム 西蔵翁の「健土健民」を 今に活かす

「健土健民」は、黒澤西蔵翁が唱えた言葉であり哲学である。

西蔵翁は、茨城の貧農に生まれ(1885年)、足尾鉍毒問題で明治天皇に直訴した田中正造に17歳で師事し、行動を共にした。その後北海道に渡って、日本酪農の父と呼ばれる宇都宮仙太郎の牧場で牧夫見習いをしながら酪農を学び、24歳で自営を開始した。西蔵翁は、酪農関係の組織(酪連、雪印など)や教育機関(酪農学園)を設立し、酪農業界の発展のために大きな足跡を残したことは、多くの人が知るところである。

TPPや穀物飼料の高騰等の問題を抱えている今、西蔵翁が唱えた「健土健民」について改めて振り返り、この哲学を今如何に活かすかについて述べたい。

西蔵翁は「健土健民」について、「健康な国民は健康な食生活から 健康な食料は健康な農業から 健康な農業は健康な農地から 健康な農地は健康な農民から 健康な農民は健康な心身から まず心田を肥沃健康にせよ」と述べ、また酪農業と「健土健民」との関係について、「酪農業とは乳牛を主体とする有畜機械化農業のことで、各種農業形態中、最高の科学的農業である。特に、天恵薄き地帯にあって、健土健民の実を上げるためには唯一の方法である。」と述べている。

筆者は西蔵翁の「健土健民」に惚れ込んでいるが、筆者なりの解釈をピラミッド状の図(図1)と以下の表現で示す。

三愛精神の結実としての

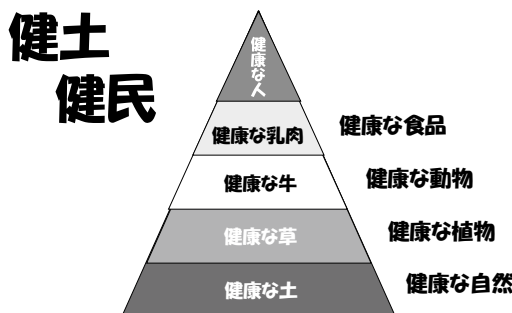


図1. 「健土健民」のピラミッドを用いた表現

「健土健民」は「健康な土があって初めて健康な民(人)が存在する」という考え方であり、「健康な土」と「健康な民」の間には、「健康な草」、「健康な牛」、「健康な乳肉」がある。つまり「健康な自然や環境」があって「健康な動植物」が存在でき、その中で「健康な食」を得ることができ、それを食べることで人間も健康になることができる。すなわち「健土健民」は、健康な「土—草—牛—乳—人」のつながりを、また同時に、健康な「自然—植物(作物)—動物(家畜)—食—人」のつながりを表しており、人は自然—植物—動物—食に支えられた存在であることを意味している。

「健土健民」は私たちにいろいろなことを教えてくれている。近年、ヨーロッパを中心に「家畜福祉」「動物福祉」という概念が重要視されてきているが、これは、周知の通り、快適性に配慮した家畜の飼い方を示した言葉であり、ヨーロッパの多くの国々では、家畜福祉を無視した飼い方は認められなくなってきている。現在、国内においても、指針等検討を行っているところである。家畜福祉は、ヨーロッパからの発想ではあるが、この考え方は、すでに「健土健民」の中に位置づけられている。「健土健民」は、健康な「自然—植物(作物)—動物(家畜)—食—人」のつながりであることをすでに述べたが、この健康な「動物(家畜)—食—人」のつながりこそが、家畜福祉が求めているものと見ることができる。すなわち「人は健康な家畜に支えられており、健康な家畜は快適な家畜飼育環境から生まれる」ことになる。

また、「健土健民」を実現する具体的な方法が「循環農法」であり、西蔵翁はこれを「循環農法図」(図2)



干場 信司 (ほしば しんじ)
酪農学園大学 学長

として表わし、「農業とは、天・地・人の合作によって、人間の生命の糧を生み出す聖業である。」と述べている。筆者は、この「健土健民」と「循環農法図」は世界に誇るべき哲学であると考えている。

以上に述べた西蔵翁の「健土健民」を現場で活かすためには、狭い分野の知識や技術だけでは通用しない。「総合力」が必要である。この総合力の必要性について、筆者自身の経験から述べたい。筆者は、畜舎施設の構造・計画・設計などを元々の専門分野としてきた。ところが、実際に農家に入ると、畜舎のことだけわかっていても何もアドバイスができないと言うことを、厭と言うほど知らされた。なぜなら、畜舎は農家の飼い方・経営の仕方・考え方を実現するための道具であって、目的ではないからである。畜舎は、家畜の飼い方・作業効率だけではなく、家畜衛生や乳質そして環境問題にまで大きく影響するので、畜産学・経営学・獣医学・食品学・環境学などの総合科学の結晶とも言えるわけである。また、酪農場は牛乳生産の場であると同時に酪農家の生活の場でもあるので、社会科学的なアプローチも当然必要となる。

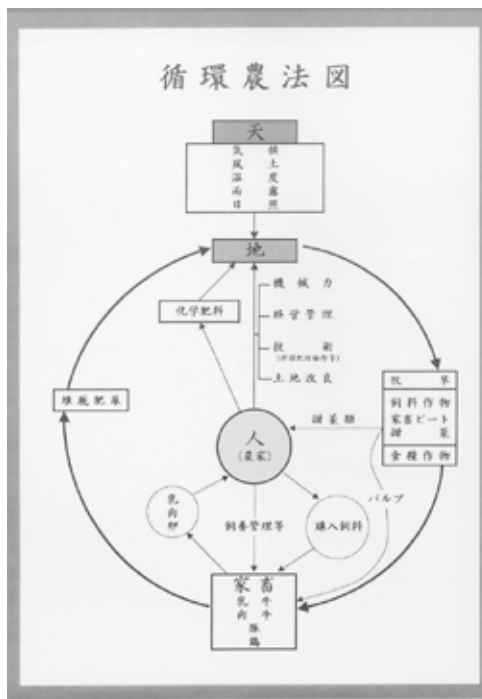


図2. 黒澤西蔵翁の「循環農法図」

このような経験を通して、筆者らは酪農家を一つの指標（例えば経済性）だけではなく、5つの指標による総合的な評価を試みてきた。ここで5指標とは、①経済性（農業所得）、②環境負荷（余剰窒素）、③エネルギー（化石エネルギー投入量）、④家畜福祉（家畜診療費）、⑤人間福祉（酪農家の満足度）のことであり（図3）。

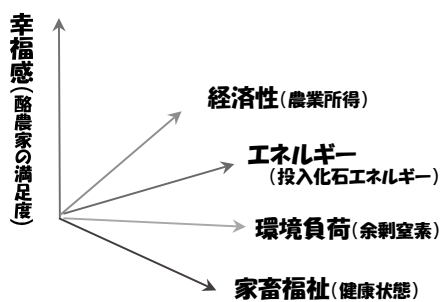


図3. 総合的な評価の指標

紙面の関係で詳細は省略するが、この5指標により、北海道釧路支庁管内A町(98戸)と十勝支庁管内B町(94戸)の酪農家群を対象として実施した総合的な評価から見てきたことは、環境に配慮して乳飼比（購入飼料費/乳代）を抑えている酪農家では5指標すべてが好ましい状況にあり、逆に乳飼比が高い酪農家ではすべての指標が好ましくない傾向になる、ということであった。つまり、将来の酪農経営を考えるときには、生産乳量や飼養頭数など外見の大きな大きさではなく、可能な限り環境にも

配慮した営農方式を選んでゆく必要があることを示している。輸入穀物飼料が高騰している昨今においては、食品残渣物の利用を含めた自給飼料による牛乳生産が、ますます求められるであろう。

これは、西蔵翁が70年以上も前に提案した、前述の循環農法図が指し示している方向と同じであることに気付く。

興味のある方は、「畜産技術」第672号（2011年5月号）に掲載の拙文「視点を定める！酪農を総合的に見る」などをご参照願いたい。また、本稿で触れている酪農家の総合的な評価に関しては、加藤博美氏らとの共同研究によって得られたものであることを付記する。